

私は西田幾太郎の「知ることは愛すること」という言葉が好きで幾度となく使っている。この意味は、知ったということは心が動かされたということであり、それはもう愛の始まりであるということと思うが、一冊の本を知り、やがて数冊の本へ、そして作家自身へと愛を拡げていってほしいものである。いろいろな作品を知り作家を愛するということは、日常生活での人との出逢いや友人の生き方を理解し愛するということと同じである。多くの人との出逢いと交流が、自己を成長させると言うことは述べるまでもないことである。

小さな器には小さな愛しか盛れないが、大きな器には大きな愛を盛ることができる。文学を通して自己という器、人間性を大きく育て膨らませることによって、より豊かな人生を築くことができる、と私は信じている。

家の思想形成の過程を明らかにする、といったような方法が中心となるであろう。その作家が最終的に到達した最高の思想を正面から論じ評価するというようなことはなるべく避けたほうがよいと思われる。

しかし、いずれは自分自身の研究方法を持たなければならぬから、研究方法の研究も怠ることなく追求していかなければならない。研究方法を具体的に取り上げ論じた雑誌の特集や書物もないわけではないから集めて参考にし組み立ててみる。またひとつには、普段から自分の研究している作家の研究論文以外の研究論文もできるだけ多く読むように心掛け、どのような方法を使って書いているかを研究論文を通して考察して身につけていくようにするとよい。自分の個性に合っていて自分を生かせるような、また、どのような作品にも対処できるように、いろいろな型の研究方法を幅広く持つことが理想である。

VII その他、論文表記上の注意事項

最後に、レジメやレポート及び論文を書くときに知っておくおよび表記上の基本を掲げておくので参考にする。

- ・ 引用文は二段（二マス）落として書く。
- ・ 論文は「」で、著書と雑誌は『』で表示する。
- ・ 引用文献には必ず出典の表示をする。

論文……筆者名「論文名」（『掲載雑誌名』 出版社名、刊行年月日）

著書……著者名『書名』（出版社名、刊行年月日）

編者……筆者名「論文名」（編者名『収録書名』 出版社名、

刊行年月日）

・ なお、論文を雑誌などに発表する場合の原稿の校正については、日本エディタースクール『校正必携』が有益である。

おわりに

記憶というものは、単に記憶力によるものだけとは言えない。現実の出来事に対する感動の深さが記憶力を高めるといっても考えられる。生涯に忘れられない一冊の本というものは誰しも持っているが、それはやはり本を読んだときの感動と強く結びついていると思われる。感動は、その人の感性にも、また本との絶妙な巡り逢いにもよるが、しかし、基礎的な読書の知識や方法を知らなければ、せっかくの感性も邂逅も生かすことはできないであろう。

それらをも含めて、ここにひとつの専門的な読書及び研究の方法を提示してみたが、煩わしいと思われるこれらの調査や分析を繰り返していくうちに、自然に自己の中に方法が定着してきて、正確な本文読解による専門的な読書というものができるようになってくる。感動した作品を正確に深く読み取ることによって、さらに感動を大きくし自己の主体に内在化させることが可能となるのである。

託されることになる。

〔一〕研究史

作品作家を研究する場合には、各々に優れた書評や評論及び研究論文があり、まずはそれを知り、整理することから始めなければならぬ。これは書誌学という学問の領域に入る。

- ・ 同時代批評（作品発表直後、作者生前、死直後）
- ・ 時代変遷による評価（明治、大正、昭和戦前、戦後）
- ・ 現在の評価

本来は全て自分で調査するのであるが、既に整理した研究年表や研究史を概観した研究の現在というような論文があり、それらをいくつか集めて参考にする。なお年ごとに研究論文を整理した『国文学年鑑』という書物もあり、昨今では作品作家研究事典という類のものも多く出ているので利用してよい。

〔二〕各テーマからの研究

- ・ 自然
作品に描かれている自然。及びそれらから考えられる作者の自然観
- ・ 家
封建体制の中の家、現代の家庭、父母兄弟姉妹、血統などの問題

・ 時間

作中に経過する時間や年月、または、回想的な書き方など時間の取り扱い方

これらの研究は、小説の主題とうまく結び付くかどうか鍵となり、作品の資をよく見きわめることが大切である。

〔二〕学問ジャンルからの研究

- ・ 伝記的研究（作家）——日記、書簡、断片、エッセイなど
- ・ 文学理論（理論）——文学のジャンルと方法
- ・ 文学史（歴史）——古典と世界文学
- ・ 文芸思潮論（流派と思潮）
- ・ 国語学、心理学、民族学など、その他の学問との関連研究

これらの研究は、いずれも専門の学識の上に立っての研究であり、ひとつの学問を治めてからの研究とも言える。

このようにいろいろな研究テーマ・方法はあるが、それは決して画一的なものではなく、研究者によって様々で独特な方法が用いられており、特に近年では構造主義や記号論など多彩となってきた。

だが、経験が浅く未だ自己の思想も確立していない学生にとっては、実際には、資料の整理、伝記と作品の関係、作品の虚構論、作

- ・動機や素材と主題
- ・人物、状況、事件の変化過程（深化）と主題
- ・各段落の進め方や序論、本論、結論などの組み立て方と主題

・視点や文体と主題

それらからどのように主題は作り上げられたか、また、主題をより効果的にするためにどのような方法がとられているかを考える。つまり、前章までの調査や分析を再確認した上で、総合的な立場からより深い主題を捉える。

（二）主題と思想（作家）

〈意義、問題提起〉

作者がこの小説を書いた意図と目的は何か。作者自身にとって、また、人間、社会、時代にとってのこの小説の意義は何か、ということについて考える。

同じく、この小説によって作者は、作者自身に、あるいは、人間、社会、時代に、何を問題提起しようとしているのか。さらに、それはどのような未来を求め、何を示唆し構築しようとしているのか、ということについて考える。

〈文学観、時代観〉

作者が属している流派や思潮の中で、作者自身が独自に確立

した文学観、あるいは、作者をとりまく環境や人生の中で独自に構築した社会観や時代観などについてを考える。

V 鑑賞と批評——（評価）

ここでは、小説の主題と作者の思想について、今までの調査や分析及び論を基底に置きながら、自分で作品を鑑賞し評価する。従って、自己の主体を明らかにし前面に追し出して十分に論じる。その例としての論点を、次に掲げておくので参考にする。

- ・第一印象と作品分析後の印象との相違
- ・自分の人生と作品や作者との比較
- ・小説の時点に立つての評価と現代社会からの評価
- ・妥当性（誰にでも当てはまる―流行）と普遍性（時代を越えて読みつがれる―古典）の有無や可能性

その他いろいろな角度から作品を照射し熟考して論じるよう心掛ける。

VI 作品・作家研究——（研究）

ここからは、研究あるいは論文制作のための心得と方法について述べる。もちろん、これが研究方法の全てというわけではなく、また、近代のいかなる小説にも当てはまる方法ということでもない。

これらは代表的な研究方法を掲げたにとどまり、以降は本人の力に

する。

(二) 様式

〈視 点〉

作者がどのような形で小説を描いているか、つまり、描写による小説か、筋書き(ドラマ性)の小説かどうか。また、一人称、私小説であるか、三人称、本格小説であるかどうか。

その上に立って、作者の視線や意識がどこに向けられているか、登場人物と作者、語り手と作者の関係など、作者のとっている位置について考える。

これらのために「小説の筋論争」と言われている芥川龍之介「文芸的な、余りに文芸的な」と谷崎潤一郎「饒舌録」の論争や「私小説論争」と言われている中村武羅夫「本格小説と心境小説」と佐藤春夫「イヒ・ロマンのこと」など、また野間宏『サルトル論』などを読んでみるとよい。

〈文 体〉

文章の韻律や修辞及び措辞から愛用語や対句表現及び感覚的表現など、さらに、反復や倒置など文の構成における文体の効果を纏める。

それは作者個人のものや時代の影響のものを考えることができるが、語句や文の癖に作家の思想が隠されている場合もある。

り、因に「文は人なり」という言葉もあるほどである。

文体は「文体論」という独自の学問として成立しており、その歴史は長いが、日本では小林英夫『文体論の理論と実践』や波多野完治『文章心理学』などが有名である。文体論は研究の基礎として一応のことは学んでおく必要がある。

この作品解釈、(一)構成、(二)様式は、作者の側に立っての分析とも言え、作家が自らの創作体験を書いた『小説作法』、または、谷崎潤一郎の『文章読本』を軸とした『文章読本』の類をなるべく多く読み、作家がどのようにして小説を書くか、小説創作の内側をよく知るようにする。

IV 総合的検討——(論)

前章までで調査や分析という段階は終り、ここからは作品作家論ということになるが、ただし、まだ自己の体験を例にひいたりせず、これまでの調査や分析に基づいて論じるようにする。

(一) 各章と主題(作品)

これまで、調査、分析してきた制作状況(作者、執筆動機・素材と材源)及び作品解釈(構成、様式)と小説の主題との関係について考える。

れるものであり、また、登場人物においても、例えば、主人公が、労働する人であれば体験的な小説に、知的な人であれば観念的な小説にとなつていくことが予測できるのである。

〈語句・文章〉

- ・ 難解な語句、及び、風俗、習慣、制度などの検証。
- ・ 原稿↓初版↓改訂。底本、異本、誤植、伏字、検閲などの検証。

・ 用語、用字、語彙、ニュアンスなどの検証。

この調査には、語句は『広辞苑』（岩波）、『日本国語大辞典』（小学館）などを、風俗、習慣、制度などについては、『風俗画報』『明治文化全集（事物起原）』、『明治ニュース事典（毎日）』『朝日新聞縮刷版』などを使う。

しかし、実際にはこれらのために既に角川書店『日本近代文学大系』を中心とする注釈書や鑑賞書が用意されている。既存の注釈書を使ってもよいが、それはあくまでも参考にとどめるべきであつて、全てを委ねるようなことがあつてはならない。注釈にあることも自分自身で逐一調べなおし、注釈を越えるぐらゐの努力をする。注釈書を批判できるようになつたら一人前とも言われる。

〈プロット〉

プロットとはいわゆる筋のことで、あら筋を述べながら要旨

を纏め、段落分けをする。単なる概要の説明ではなく、小説の三要素といわれる(一)人物(性格、行動)(二)状況(時代、環境)(三)事件(展開)の変化過程を確認するつもりで進めるようにする。

あら筋を説明する詳しさの程度は、受け持った小説の長さや与えられた時間、論文であるならば枚数によって調節する。説明の上手下手は、報告者が作品をどれだけ深く読み取ったか、どれ程読みこなしたかにかかっていると云える。

〈組み立て〉

まず各段落のつながりと各章の位置を明らかにする。その上で、序論、本論、結論、もしくは、起、承、転、結などがどのように組み立てられ展開しているか、いわゆる小説の構成を分析する。

小説の骨組みの解析であり、これがどのような効果を上げて主題を高めているかを考えていく。

〈主題〉

小説の主題を捉える。この作品を通して作者が言いたいこと、訴えたいことは何か。そこから引き出すことのできる思想などについてを纏める。

あくまでも作品の中から現われてくる主題であり、小説の外郭(制作状況)〈文学史〉などの知識は考慮に入れないように

調査によるもので、個人全集や文学史書及び歴史書を資料として、あくまでも客観的に作品の成立事情を説明するように務める。

〈作品初出〉

小説が発表された年月日と掲載雑誌及びその雑誌がどのようなものであるかを調べる。

また作者と掲載雑誌との関係や掲載のいきさつなどがわかれば記す。

〈その頃の作者〉

おおざっぱでよいが、当時の文芸思潮及び社会状況と作者との関係を文学史書や歴史書などによって抑えておく。

次に小説を書き始めた時期から発表前後の作者の生活状況や文学観について詳しく調べる。

〈執筆動機〉

小説を書くには必ず動機というものがあり、この動機は後に主題や思想を引き出すための重要な手掛かりとなるから、丹念に調べる。

〈素材と材源〉

生い立ちや友人関係及び自我形成期などを中心とした伝記、または古典や外国文学の影響などを調べる。それはやがてモデ

ル論や虚構論という研究につながっていくものである。

このうち〈作品初出〉と〈その頃の作者〉の前半は、文学事典〔日本近代文学大事典〕講談社などによって調べ、また〈その頃の作者〉の後半と〈執筆動機〉と〈素材と材源〉とは密接に関係しているので、同時に、個人全集収録の日記、書簡、断片、及び、研究者による年表、評伝、回想などを使って調べる。

Ⅲ 作品解釈——(分析)

ここからは、直接に小説を扱うことになるが、まだ、作品に現われた事実を客観的に正確に把握することに務め、自己の推測や考えは極力ひかえるようにする。

(一) 構 成

〈作中時所・設定人物〉

いわゆる舞台背景と登場人物の構成である。まず小説に扱われている年代とその当時の社会状況を作品の中の事実から抑える。続いて、登場人物の、性別、体格、年齢、職業、性格などの特徴を明らかにするとともに、それぞれの役割りについて考える。

小説に扱われている社会によってある程度の作品規定はなさ

順とその方法の基本を提示してみることにする。

目次

- I 印象批評——（感動）
- II 作品制作状況——（調査）
 - 〈作品初出〉
 - 〈その頃の作者〉
 - 〈執筆動機〉
 - 〈素材と材源〉
- III 作品解釈——（分析）
 - 〔一〕 構成
 - 〈作品時所・設定人物〉
 - 〈語句・文章〉
 - 〈プロット〉
 - 〈組み立て〉
 - 〈主題〉
 - 〔二〕 様式
 - 〈視点〉
 - 〈文体〉
- IV 総合的検討——（論）
 - 〔一〕 各章と主題（作品）
 - 〔二〕 主題と思想（作家）

〈意義、問題提起〉
〈文学観、時代観〉

- V 鑑賞と批評——（評価）
- VI 作品・作家研究——（研究）
- VII その他、論文表記上の注意事項

I 印象批評——（感動）

まず小説を一読した直後の感銘、いわゆる普通の感想文を書く。作者や文学史文学論の知識すなわち先入観の一切に捉われることなく、全くの主観による自由な発想のもとで感想を纏める。内容だけに限ることはなく、言葉や文体及び描写など形式的なことであっても気づいたことがあれば触れておく。書き方としては、あえて整った文章でなくても箇条書きという体裁を取ってよい。

このような直観的な鑑賞は、詩歌では肯定されているが小説研究ではタブーとされているようなところがある。だが、様々な感想、素朴な疑問や違和感など、この直感が後に大きな研究テーマを謝当てることもあり、第一印象は消えてしまわないうちに大切に纏めておくべきである。

II 作品制作状況——（調査）

ここでは、小説の外郭を捉えることを目的としている。主として

近代小説研究への試み

伊 藤 淑 人

はじめに

小説を読めば、何らかの印象を受け心を動かされる。その感動は、自己の経験を形として明確に示してくれたことによるものであったり、新しい人間や社会との関係を開いてくれたものであったりすることによる。あるいは、そのような感動だけで小説を読むという行為は終っているのかも知れない。だが、人を愛すればその人のことを多く知りたいと思うようになるのと同じように、感動した作品をより深く読み、それを与えてくれた作家自身のことをより知りたいと思うようになるのは必然であろう。そこに文学研究の成り立ちを認めることができる。

さて、その小説研究についてであるが、仮りに、野原に一本の美しい花が咲いているとする。その美しい花を、おしべやめしべの数、がくや花びらの枚数、好む土壌や咲く季節、学名や分類、というよ

うに学的に分析し説明したとする。その行為は、果して花の美しさを認識するために役立つであろうか。そう思うことは多分重大な誤解で、花の美しさはやはり、「心で捉える」ものであり、「学的な分析」によつてではない。

しかし、それとは全く相反する考え方もないわけではない。一個の人間には、年齢によつて形成される精神性や職業によつて規定される性格というものもある。また、その容姿容貌の良し悪しが心理に深い影響を与えもする。このように考えた場合、客観的な事実が示す文学性もまた少なくはないのである。もちろん、作家はそのことを十分に承知して小説を創作している。事実の意味するもの、事実に託された主題、その組み立て方や表現方法、つまり、小説の構成や様式を分析して説明することによつて、作者の意図や目的に近づき正確で深い本文の読解に到達することも可能なのである。

以上のような認識の上に立って文学研究の必要性を認め、小説の〈作品分析〉から〈作品論〉、そして〈作家論〉へという研究の手